

# フィールド風

(現場)からの風

宮田守男

8月中旬、秋野菜の作業が本格化する時季に、畑で作業しているとお客様から「何の作業ですか」との声。旅行先でも、夫婦連れ

で毎日欠かせないウォーキングを楽しんでいる関西からのお客様。「名所旧跡は毎日堪能しているから、自然いっぱい里山が素敵」と目を輝かせる。何気なく毎日過ごしている里山の地域資源が、訪れた皆さんには、この上ない魅力に映るのだと嬉しくなる。

## 未来を見越した発想ができる人材が求められている

そして「地元の皆さんは、花三昧をどんな風に捉えていますか」との問い。訪れたが、花三昧の伝えたい地元の想いが解らないらしい。観光局発足当時企画に携わった私には、心に突き刺さる言葉

だった。「三昧」は仏教やヒンドゥー教における妄想で、精神集中が深まりきった状態のことをいう意味を持つ。当時、企画するときコーディネーターから「村民心一つにして『花』の資源に集中し

化などが響いたのか、特に中高年層のお客様が激減したとの情報。関係する業種の団体宿泊・飲食・御土産への影響が出たようだ。訪日外国人に期待する対応は、韓国一国の国際問題でも顕著な影響がでるか予想しながら、これからの日本社会が乗り越えるべき問題を考えさせられた。令和

策総合研究所理事長であるジャーナリスト・河合雅司さんの「未来の地図帳」。20年後の日本の姿を地図帳に明らかにしている。20年後、未来の日本人が、日本列島のどこに住んでいるか予想しながら、これからの日本社会が乗り越えるべき問題を考えさせられた。令和

する。と提言している。これまでの既定の考え方では乗り越えられない社会が待ち構えている状況が随所から読み取れる。当たり前企画ではない発想が求められる時代に対応して行かなくてはならない覚悟が求められている。(NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上)



農地の一面に植栽された「芙蓉」の樹木に、地域全体での取組への期待が高まる